

龍文透彫帯金具の製作技術

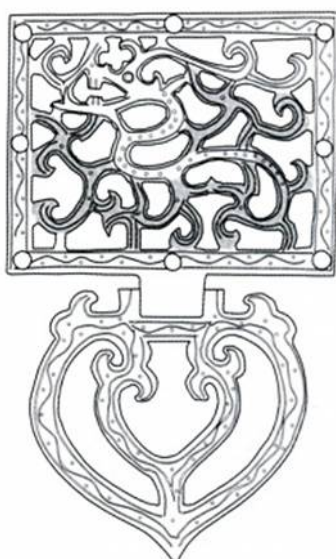
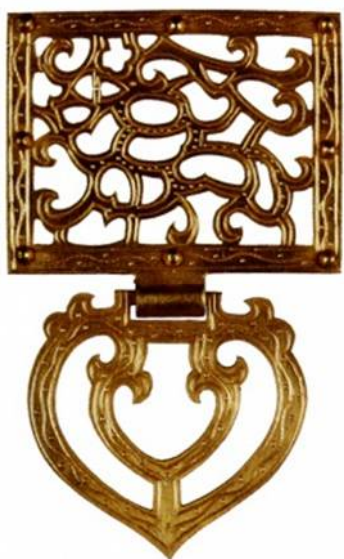
～七観山古墳出土と韓国韓国慶尚北道林堂洞 7B 号墳出土の帯金具の比較～

メモ)鉄本 2024.02.01

七観山古墳から出土した龍文透彫帯金具の製作場所については、日本国内説と朝鮮半島説とがある。この帯金具は、朝鮮半島の三国時代に新羅であった韓国慶尚北道の林堂洞^{いむだんどん}7B号墳出土の帯金具と酷似し、同じ工人集団によって製作された可能性が指摘されている。その類似点を製作技術面から比較する。

1. 2つの帯金具の復元図

(1) 七観山古墳出土の帯金具(復元図と実測図) 5世紀前半の二段築造の円墳(土取り工事で破壊)



帯金具は短甲に付着した状態で発見された。金具の裏面には布の痕跡がある。
龍文は、顔を左に向け、胴体の鱗は点列文で描かれている。



(2) 林堂洞 7B 号墳出土の帯金具 5世紀前半の築造




三国時代(4～5世紀)の朝鮮半島

慶尚北道の林堂洞7B号墳はこの辺りに位置

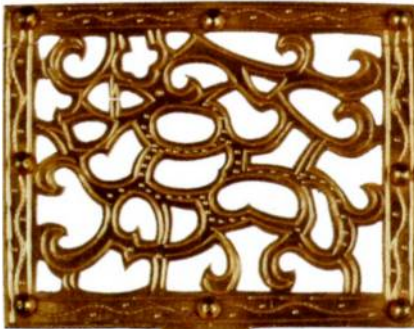
林堂洞遺跡は、慶尚北道慶山市造永洞 522 番地一帯の低丘陵地にある。

* 上記の帯金具の図は、特別展図録『海を越えたつながり 倭の五王と東アジア』から抜粋

細部の表現	類型
蹴彫表現	Aタイプ:頭から胴体あるいは肢にかけて蹴り彫りが連続し、胴体の把握が容易なもの。 Bタイプ:基本的に透かし彫りで切り抜いた部分の輪郭に沿って蹴り彫りがめぐるもの。
爪と羽毛の接点部の表現	Aタイプ:爪と羽毛の輪郭に沿って、蹴り彫りが施されるもの。 Bタイプ:、あくまで透かし彫りで切り抜いた部分の輪郭に沿って蹴り彫りがめぐるもの。 
列点文の表現	Aタイプ:胴体に連続する列点文が施されるもの。 Bタイプ:屈曲部や各部位が分岐する箇所を中心に分散的に施されるもの。
歯の表現	Aタイプ:歯に刻みをいれたり、鋸歯状に蹴り彫りを施したりするもの。 Bタイプ:特に細部を表現しないもの
胴部の羽毛の表現方法	Aタイプ:胴部に2~5本程度の斜線を一単位として、羽毛の表現を施すもの。 Bタイプ:なにも施さないもの。

(3) 2つの帯金具の比較

【七観山古墳】



【林堂洞 7B 号墳】



【新沢千塚126号墳】



古墳名称	透彫文様					細部表現				
	四肢	耳	歯	胴体幅	構成	蹴彫	列点文	爪・羽毛の接点	歯	胴部の羽毛
七観山	II	B	A	B	A	B	A&B	A&B	A	B
林堂洞 7B 号	II	なし	A	B	A	B	B	B	A	B
新沢千塚 126 号	I	A	A	A	A					

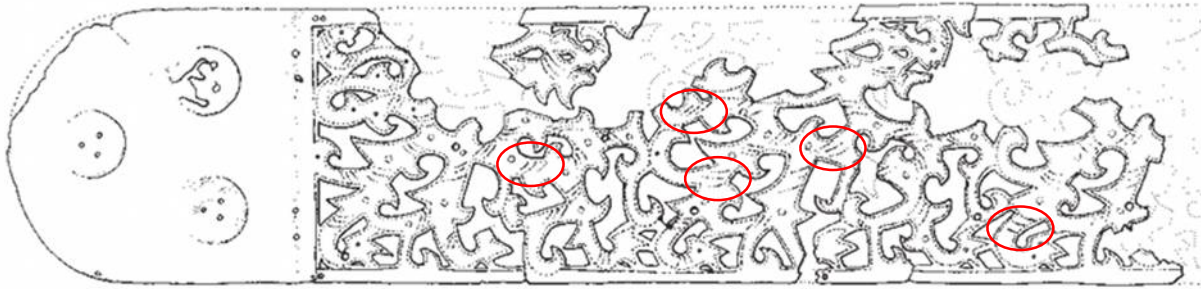
* 上記の比較表は、論文「古墳出土龍文透彫製品の分類と編年」(高田貫太 2013)の一覧表から抜粋

* その他の類例として、月岡古墳(福岡県うきは市)の金銅製帯金具がある。古墳は墳丘長80mの前方後円墳。右図は、うきは市立吉井歴史民俗資料館 HP から一部抜粋



【所見】 七観山古墳、林堂洞 7B 号墳の龍文を比較すると、次のような共通点が所見される。①四肢の表現に一部足りないところがある(タイプⅡ)。②歯は上下に明確に描かれており、刻みが入っている(タイプ A)。③胴体幅は一定である。列点文は、七観山古墳では連続した列点文と部位の分岐点に施されている。(タイプ A&B) ④両帯金具とも胴体には羽毛は描かれていない。(タイプ B)

(参考) 胴部の羽毛がタイプ A のもの (赤い楕円に囲まれている部分が羽毛描写 多数あり)



集安太王陵(中国吉林省集安市)出土

3. 金属工芸技法の概要

(1) 彫金の技法

①透彫り(すかしぼり): 金属、木材などの材料をくりぬいて文様を表す技法。籠目細工ともいう。古墳時代の作例としては、刀剣の鏝、馬具、装身具など。

国宝の金銅透彫鞍金具(菅田八幡宮 所蔵)などには新羅文化の影響が見られる。(右の写真参照)



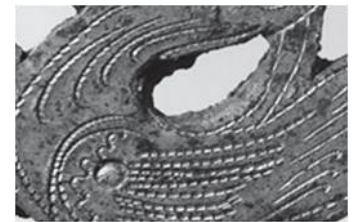
②彫り: 鑿を用いて地金を彫り模様や図案・文字を入れる。彫りには毛彫り(けぼり)、蹴り彫り(けりぼり)などがある。

・毛彫り: 刃先が三角形に尖った鑿を用い毛のような細い線を彫る技法
古墳時代の作例としては、兜や鞍金具への線刻例が見られる。
右図は、法隆寺の灌頂幡(天人)の一部



・蹴り彫り: 先を薄く扁平にした鑿を用い、角を軽く浮かせて蹴るようにして線刻する技法(右写真参照)

作例としては、祇園大塚山古墳(千葉・木更津市)の金銅製眉庇付胄で、魚、鳥、獣がこの技法で表されている。



	魚類	哺乳類	鳥類	龍か
祇園大塚山				

祇園大塚山古墳(千葉・木更津市)出土の金銅製眉庇付胄と彫金文様(蹴り彫り)

- ③打出彫： 金属の表裏面から凹凸に打ち出し、模様を浮彫で仕上げる技法
右図は鍔金具に見られる実例
七観山古墳の帯金具の点列文はこの技法によるものか？



- ④象嵌：^{ぞうがん} 金属などの表面を削り取り、ここに他の素材を嵌め込む技法
この技法は、糸 (or 線) 象嵌、布目象嵌、切嵌 (きりはめ) 象嵌、
銷込 (とかしこみ) 象嵌に分けられる。
作例としては、石上神社の七支刀、稲荷山古墳 (埼玉) 出土の鉄剣の
金錯文字 (右写真参照)、堺市博物館展示の大塚山古墳出土の
金環を埋め込んだ銚がある。



(2) 鍛金の技法

金属の展延性、収縮性を利用して様々な器物を作る技法。鍛造、打物、鎚金 (ついきん) ともいう。
人類最古の金属成形技法である。日本では弥生時代に大陸から採鉱、冶金技術とともに伝来した。

- ①鎚起技法：^{ついき} 打ち延ばした板金を表裏から打ち出し、絞り縮めなどして立体的に成形する技法。
古墳時代の太刀、馬具、装身具などに見られる。奈良時代の銅鑼が典型的な作例。
- ②板金技法：^{ばんきん} 金属板を折り曲げ、ロウ付けなどして立体的なものを作る技法。
作例は、7世紀に創建された崇福寺の塔心礎から出土した金銀舍利容器。
- ③押出技法：^{おしだし} 原型の上に薄い板金をのせ、上からたたいて原型の形を転写する技法。奈良時代に
盛行した。法隆寺の玉虫厨子の千体仏は典型的な作例。

(3) 鑄金の技法

鑄造に技法による金工の一種。

- ①惣型鑄造：^{そう} 原始的な技法で、器物の雌型を土で作り、火で乾燥させた内面に金属を流して鑄造する
技法。銅鑿はこの技法を用いて製作する。
- ②蠟型鑄造：^{ろう} 蜜蠟で作った原型を土で囲み、中の蠟を焼き流すことによって生じた空洞に溶けた金属を
流し込む技法。金銅仏などの製法で精巧なものを作るのに適す。
- ③砂型鑄造：^{すながた} 砂を固めて乾燥させた型を用いて、銭貨や柄鏡などを多量に生産する技法である。
- ④込型鑄造：^{こめがた} 原型を土で塗り込めて分割したのち、原型を取出し、型を閉じ合わせて鑄造する技法。
これは近代の方法である。

【参考文献】

- ・特別展図録『海を越えたつながり 倭の五王と東アジア』 堺市博物館 2021
- ・『日本大百科全書 (ニッポニカ)』 小学館
- ・『百科事典 マイペディア』 電子辞書版 日立ソリューションズ・クリエイト 2015
- ・『国立歴史民俗博物館研究報告第178集』論文「古墳出土龍文透彫製品の分類と編年」 高田貫太 2013
- ・歴博フォーラム『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』 上野祥史 国立歴史民俗博物館編 六一書房 2013
- ・『東アジア文化交渉研究第3号』論文「慶山林堂遺跡出土古碑の内容とその歴史的背景」 篠原啓方 2011